

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

案内

- 翻訳通信の主な内容
『翻訳通信』は翻訳とそれに関連するテーマを幅広くとりあげる予定である。
主なテーマをいくつか紹介する。

翻訳批評

- 美しい日本語としての翻訳 - 矢川澄子訳『不思議の国のアリス』
『翻訳通信』に掲載する記事がどのようなものになるかを示すために、別の機会に別の媒体で発表した文章を再録する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳通信の主な内容

『翻訳通信』は翻訳とそれに関連するテーマを幅広くとりあげる予定である。たとえば、以下のテーマを扱う。

翻訳とは何か

翻訳は時間と空間と言葉の壁を超えて先人から学ぶための手段である。翻訳があるので、数千年の昔から現代までのどの時期に、世界のどこで、世界に何千とある言語のどれで考えられたものでも、人類が文書の形で蓄積してきた知識であれば、すべてを学ぶことができる。翻訳は、文明と野蛮を隔てるものであり、人類と類人猿を隔てるものだとすらいえる。

翻訳の本質は、時間と空間と言葉の壁を超えて先人から学ぶための手段になることにある。この点を考えれば、翻訳を「語学」という観点から扱うのがいかに馬鹿げているかが分かる。外国語で書かれた文章を母語に変換する方法という観点から扱うのがいかに馬鹿げているかが分かる。「誤訳」（英文和訳の常識からの逸脱）という観点だけから翻訳の質を論じるのがいかに馬鹿げているかが分かる。

『翻訳通信』はこのような観点から、翻訳について考えていく。

翻訳批評

翻訳の質は、「誤訳」の多寡では判断できない。外国語で書かれた知識を母語の読者に伝えるのが翻訳の任務であり、この任務をどこまで果たしているのかが、翻訳の質をはかる基準でなければならない。つまり、「原著者が日本語で書いたとすればどう書いたであろうか」が翻訳の質を判断する基準になる。

翻訳批評の目標のひとつは、どの翻訳を選ぶべきと考えるかを読者に伝えることにある。著者の名前で本を選ぶ方法は、だれでもとっている。たとえば好きな小説があると、同じ作家の別の小説が読みたくなる。だが翻訳書では、原著が同じでも訳者が違えば、印象がまるで違うことがある。

『翻訳通信』は翻訳書を読む際に、原著者ではなく、訳者で本を選ぶ方法を紹介する。

言葉の意味

何気なく使っている言葉には意外な意味があることがある。英語の語や句で常識になっている訳

語がじつは、英語の語句の意味とは大きくずれていることがある。片仮名の語はほとんどの場合、もともなった外国語の語とは意味がずれている。

『翻訳通信』はこれらの点を考えていく。

辞書はいかにあるべきか

情報技術の発達によって、過去には考えられなかった形で辞書を編纂できるようになった。紙の辞書をそのまま画面に移しただけの電子辞書は、情報技術を活用したものとはいえない。ではどのような辞書が理想なのだろうか。『翻訳通信』はこの点を考えていく。

読書と出版をめぐる状況

書店に行っても買いたくなる本がない。読みたくもない本が山積みされていて、少しも楽しくない。逆に、読みたい本はなかなか探せないし、すぐに絶版になって買えなくなっていることも多い。

出版業界はいま、過去に例のない不況に苦しんでいる。書籍の市場規模が縮小するなか、各出版社は下手な鉄砲も数打ちゃ当たるとばかりに、点数勝負に走っている。『翻訳通信』は読書と出版をめぐる状況を考えていく。

広告

『翻訳通信』には、翻訳書と翻訳関連書、辞書の広告を掲載することがある。広告の申し込みは編集人まで。

好評 翻訳論から知の最前線に迫る！

翻訳とは何か - 職業としての翻訳

山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甦る名著 - 絶妙に英訳された15万用例

NEW 斎藤和英大辞典

斎藤秀三郎著 B5判・1,400頁 本体14,200円

TranRadar 電子辞書 SHOP

<http://www.nichigai.co.jp/translator/>

定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日外アソシエーツ <http://www.nichigai.co.jp/>

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8 03-3763-5241

美しい日本語としての翻訳

- 矢川澄子訳『不思議の国のアリス』

『翻訳通信』に掲載する記事がどのようなものになるかを示すために、別の機会に別の媒体で発表した文章を再録する。

「声に出して読む」というのは、ほんとうはどこかおかしい。「読む」というのは本来「声に出す」ことなのだから。

いつしか、音読は幼稚で黙読が正しい読み方だという考えが力を得て、常識にすらなつた。だが、何といわれようと、人間の本性はそう変わりはない。黙読をしているときにも、唇や喉が無意識のうちに動いているものだし、動いていなくても、頭の中では音が聞こえているものだ。

本は見るものではない、読むものだ。目で文字を追ひ、声に出し、耳で聞く。これではじめて理解できる。覚える。身につく。これが読書の本来のあり方だとするなら、声に出し、耳で聞いて理解でき、記憶できる文章が理想だといえる。

そう考えると、翻訳は分が悪くなる。声に出すことができない文章、耳で聞いたらとても理解できない文章、記憶などとてもできない文章、たいていの翻訳はそういう文章の典型だといえるものだからだ。しかし、どの翻訳もそうだというわけではない。声に出して読みたくなる文章を書く翻訳家もいる。その典型が矢川澄子だ。

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』は何種類もの訳が出版されているので、翻訳の特徴や質を比較するのに適している。矢川澄子訳（新潮文庫）と高橋康也・迪訳（河出文庫）、柳瀬尚紀訳（ちくま文庫）を比較してみよう。冒頭部分はこうなっている。

矢川訳13ページ

アリスはそのとき土手の上で、姉さんのそばにすわっていたけれど、何もすることはなく、たいくつでたまらなくなつてきてね。姉さんの読める本を一、二度のぞいてみたけれど、挿絵〔さしえ〕もなければせりふもでてこない。「挿絵もせりふもない本なんて、どこがいいんだろう」と思ってさ。

高橋訳10ページ

アリスは、お姉〔ねえ〕さんと並〔なら〕んで土手にすわっていましたが、なにもすることがないので、たいくつしてきました。お姉〔ねえ〕さんの読んでいる本をちらっとのぞいてみたのですが、その本にはさし絵もないし、会話のやりとりもありません。アリスは思いました。「絵がなく、おまけに会話もない本なんて、いったいなんの役に立つっていうの？」

柳瀬訳11ページ

アリスは姉とならんで川べりにすわって、なにもしないでいるのがそろそろ退屈になっていた。一、二度、姉の読んでいる本をのぞいてみたけれど、絵もなければ会話もない。「読んでもしょうがないのに」とアリスは思った。「絵も会話もない本なんて」

わずかこれだけでも、三つの翻訳の特徴がわかる。柳瀬訳はあきらかに黙読用だ。高橋訳はたぶん音読用だろう。そして矢川訳はあきらかに朗読用だ。お父さんかお兄さんが女の子に読んであげる、そういう文章になっている。

この点をもっとはっきり示すのが言葉遊びの訳し方だ。アリスが井戸のような穴に落ちていく場面から引用しよう。

矢川訳17ページ

またもやひとりごとのはじまりだ。「このまま地球をつきぬけちゃうのかしらん？ 頭を下にしてあるてる人たちのなかへ、ひょっこりあたしが出ていったら、さぞこっけいだろうな。たしかツイセキチュウとかいうのよね - -」（ヒヤヒヤ、こんどばかりは誰にも聞かれないでよかった。このことばはどうみても怪しげなもの。地球の正反対側のことなら対蹠地〔タイセキチ〕じゃないか）.....

高橋訳 14 ページ

アリスはひとりごとのつづきをしました。「もしかしたら、地球をつきぬけて落ちていくんじゃないかしら！ 頭を下にして歩いている人たちの中にひょっこり出たりしたら、さぞおかしいでしょね！ 反対人〔はんたいじん〕っていったと思うけど - -」（こんどはだれも聞いていなくてアリスはほっとしました。少しちがっているような気がしたからです。ほんとうは反対人ではなくて対蹠人〔たいせきじん〕* というのです）。

* 日本とアルゼンチンのように地球の反対側に住む人間。antipodes は「蹠（あしうら）が向かいあわせ」の意。「反対人」（antipathies）という言いまじりは、これから多くの「なじめない」人物に出会うはずのアリスの不安のせいだ。

柳瀬訳 14 ページ

やがて彼女はまたしゃべり出した。「あたし、このまま落っこちて、地球を通り抜けてしまうんじゃないこと！ 頭を下にして歩いている人たちのなかにひょいと出ていったりしたら、とってもおかしんじゃない！ 退席地〔たいせきち〕っていったかしら - -」（今度は誰も聞いていないのでほっとして、というのもこの言葉はどれも正しくなさそうだった）.....

柳瀬訳が黙読用だというのは、「退席地〔たいせきち〕っていったかしら」を読んでみるとすぐにわかる。ひとりごとで「対蹠地」を「退席地」と言い間違えることなどありえない。どちらも読みは「たいせきち」なのだから。黙読でなければ、何の意味ももたない訳語である。音読には適さないし、まして、朗読して十歳の女の子に聞いてもらうことはできない。

高橋訳は「反対人」という訳語を使っていて、音読ができる。だが、訳注はまったくいただけない。これでは、せっかく楽しむために読んでいるのに、お勉強の雰囲気になる。なぜこのような訳注をつけるのか。答えははっきりしている。原書講読で『不思議の国のアリス』を読む英文科の学生を想定読者に行っているからだ。だから、お勉強の雰囲気という叱られるかもしれない。勉強の雰囲気が研究の雰囲気というべきだろうか。

矢川訳が朗読に適していることも、「ツイセキチュウ」という訳語を読んでみればすぐにわかる。小学校中学年の女の子なら、耳で聞いて楽しんでくれる訳文だ。

以上の二か所を比較しただけで、三つの訳の特

徴がかなりよくわかる。

柳瀬訳は英語の先生らしく、英文和訳の伝統をしっかり受け継いだ訳だ。机に向かってひとり静かに読む。そういう読者を想定している。これが基本だ。この基本の上に言葉遊びを少々散りばめた点が柳瀬訳の特徴である。

高橋訳は東京大学名誉教授、英文学とくにシェクスピアとキャロルの研究の第一人者にふさわしく、何よりも研究成果の披露を目的にしているように思える。この訳書を読むときは、原著を真ん中におき、左右を権威ある英英辞典と研究書でかため、そのかたわらに訳書をおいて読まなければいけない。読書を楽しむなんぞと考えるべきではないのかもしれない。

矢川訳はまったく違う。十歳の女の子にせがまれて話し、書いた原著を、十歳の女の子に読み聞かせる、そういう読者を想定して訳されている。何よりも原著そのままに、楽しいお話にするように訳されている。

文章をうまく書けるようにするには、何よりも名文を読むべきであり、そして、間違っても翻訳物を読んではいけないと助言する人がいる。前半はもちろん、正しい助言だが、翻訳を職業にしている立場から、後半には少々参る。たしかに、読んではいけない（少なくともよほど用心しながら読まなければならない）翻訳が多すぎる。

だが、翻訳はみなそうだとはいえない。だれにもいわせない。矢川澄子の訳をみてほしい。文句なしの名文、まさに美しい日本語ではないだろうか。原著者が日本語で書いたとしたら、こういう文章になったのではないかと思えるのではないだろうか。